



第47回解剖体慰霊祭を執り行いました

総務課総務係

10月17日(木)、医学部体育館にて、第47回解剖体慰霊祭が執り行いました。この慰霊祭は、医学の教育・研究のために尊い御遺体を御提供くださいました方々を慰霊するものです。

当日は、御遺族、有終会会員、来賓、教職員及び医学科2年生等、約130名が参列し、黙祷を捧げたあと、楫医学科長が、2023年10月から2024年9月までに系統解剖学、病理解剖または法医学解剖をさせていただいた151名の芳名録を祭壇に拝納いたしました。続いて、石原俊治医学部長が、「解剖学実習は、単に学術的な学びにとどまらず、ご献体者やそのご遺族に想いを馳せる中で、生命の尊さや医療における倫理観、使命感を学ぶ機会でもあります。一昨年3月に発覚しました御献体に対する不適切な対応事案について、失われた信頼を取り戻すために、今後ともたゆまぬ努力を続け、未来の医療人を育てる責任を果たしていきます。御霊のご冥福を心よりお祈りし、ご遺族および関係者の皆様に深い敬意と感謝を申し述べます。」と慰霊のことばを捧げました。

また、学生代表が、「解剖学実習を通じて、誰一人として教科書通りの御身体の方はいらっしゃらないこと、人の死に真摯に向き合い続けることで、患者さんやそのご家族に寄り添った医療を提供できること、また、仲間を尊重し、お互いに支えあうことの大切さを学ぶことができました」と話しました。そして、「医療の進歩を支え人々の健康を守るため、未来を見据えた医療の実現に貢献してまいります。御献体賜った方々のご冥福を心よりお祈りし、感謝の辞とさせていただきます。」と感謝のことばを述べました。

その後、参列者全員で献花を行い、御献体くださいました故人のご冥福をお祈りし、閉式となりました。

最後になりましたが、医療のさらなる発展のために御献体くださいました故人の皆様、並びにご遺族の皆様の並々ならぬご理解とご厚意に心より感謝申し上げます。

問い合わせ先 総務課総務係 TEL:0853-20-2016



慰霊祭の様子



Shimane University Hospital
島大病院ニュース

2024年
11月
Vol.133

NEWS



CONTENTS

- ・肉腫・希少がんセンター開設について
- ・学生・職員を対象にHPVワクチンのキャッチアップ接種を実施しています

中表紙

裏表紙

- ・第47回解剖体慰霊祭を執り行いました

表紙：事務部長 浦田 明宏

肉腫・希少がんセンター開設について

肉腫・希少がんセンター長 やまもと そういちろう
山本 宗一郎

このたび肉腫・希少がんセンターのセンター長に就任しました整形外科の山本宗一郎です。これまで整形外科骨軟部腫瘍専門医として診療を行ってきました。パリパラリンピック車椅子テニスダブルス銀メダリストの三木拓也選手も筆者が主治医として治療を行い、このたびメダル獲得の報告として当院へ来院いただきました。(写真1)

整形外科で取り扱う原発性悪性腫瘍の多くは肉腫です。肉腫とは骨・脂肪・筋肉など内臓以外の組織から発生し骨肉腫がよく知られています。内臓などに発生する癌とは異なり、発生頻度は低く、薬物療法や手術方法も特殊であり、専門知識が必要となります。骨肉腫は整形外科で治療を行います。脂肪・筋肉など軟部組織にできる肉腫(軟部肉腫)は体のどの部位にも発生します。複数の部位に広がり、多くの診療科の連携も必要になります。

希少がんとは、「概ね罹患率(発生率)人口10万人当たり6例未満」「数が少ないため診療・治療上の課題が他のがん種に比べて大きい」これら二つの条件に該当するがんのことをいい、肉腫を含む200種類近い悪性腫瘍が分類されます。それぞれの症例が少ないため、その診断や治療方針の決定が困難な場合もあり、多くの診療科等の連携が必要となります。

当センターは、肉腫に代表される希少がんの患者さんが、その診断から緩和ケアを含む治療まで、当院で安心して受けていただける体制の構築を目指して設立させていただきました。治療方針の決定には病理診断が不可欠であり、その診断結果をもとに、院内カンサーボードで関連する診療科やセンターの協力を得て治療方針を検討し、最適な方針を決定し、担当診療科が具体的な治療を進めていきます。

患者さんにとってよりよい医療の提供となるように、肉腫を中心に希少がんの診療を病院全体で推進できるよう取り組んでまいります。

引き続き、皆さまのご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

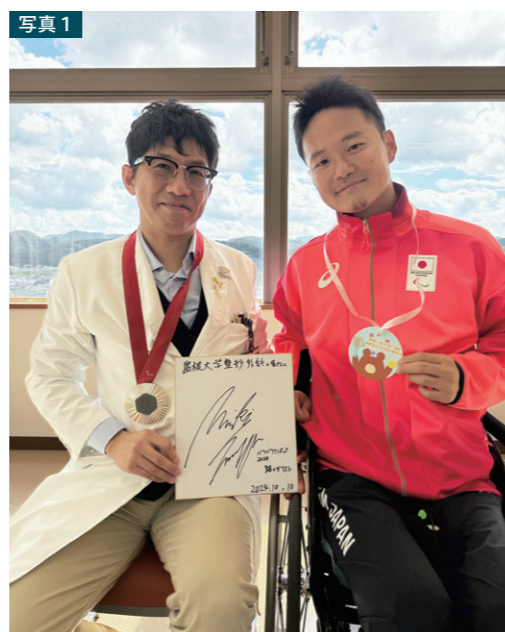


写真1
左から筆者、三木拓也選手(パリパラリンピック車椅子テニス銀メダリスト)

学生・職員
を対象に

HPVワクチンの キャッチアップ接種を実施しています

小児科 教授 たけたに たけし
竹谷 健

子宮頸がんは日本では年間1万人以上の女性が発症しており、比較的若い年齢層で発症することも多いがんで、ほとんどの子宮頸がんはHPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が原因です。HPVワクチンを接種することで感染を防ぎ、子宮頸がんを予防することができます。

日本では2013年から定期接種が開始されましたが、接種後の多様な症状が報告されたため、開始から2か月で積極的な勧奨が差し控えられました。

その後の調査で2021年に安全性について懸念がないことが改めて確認され、接種による有効性が副反応のリスクを上回ると認められたことから、2022年4月から接種勧奨が再開されました。

この差し控えられていた期間に定期接種を逃した世代を対象にキャッチアップ接種の機会が設けられ、対象者は2025年3月までの接種が公費で負担されます。

このキャッチアップ接種率は全国で6.1%(高根県は10.8%で全国1位)と決して多くない割合であることから、本学の学生と職員にHPVワクチン接種についてアンケートを実施しました。その結果、大学で集団接種が実施されるのであれば希望するとの回答が多くあったため、2024年9月26日(木)と10月3日(木)に本学学生と職員を対象に、キャッチアップ接種該当者に対し、当院で集団接種を実施し、2日間で併せて52名に接種を行いました。当日は、病院のある出雲キャンパスだけでなく、松江キャンパスからも職員が引率し、希望する学生が来院しました。接種を受けた者からは「大学で機会が設けられたことで接種につながり、安心して受けることができた。」との声が聞かれました。

現在、17~27歳の女性で、未接種の方がおられましたら11月までに1回目の接種をしていただくと、公費による接種期間に間に合います。また、2回目、3回目の接種が完了していない方もぜひこのHPVワクチンのキャッチアップ接種の期間内(2025年3月31日(月)まで)に接種を受けられることをお勧めするとともに、地域の医療機関におかれましても、定期接種世代への接種とともにキャッチアップ世代への接種勧奨を行っていただきますよう改めてお願いいたします。

なお、当院では2022年4月から、接種後に生じた症状に苦しんでいる方に寄り添った支援を行っております。そのような患者さんがいらっしゃいましたら、ご相談ください。

HPVワクチン接種対象者

定期接種対象者	小学6年~高校1年相当の女子
キャッチアップ接種対象者	1997年4月2日から2008年4月1日の間に生まれた女性のうち、過去にHPVワクチンの接種を合計3回受けていない者



問診を受ける学生

接種を受ける職員

(予約窓口：地域医療連携センター 0853-20-2068)

問い合わせ先

肉腫・希少がんセンター TEL:0853-20-2242

問い合わせ先

小児科外来 TEL:0853-20-2383



島大病院ニュース 2024年11月

ご報告

「オキフェス2024」を開催しました！ ～総合診療と地域医療の魅力を学ぶ～

総合診療医センター 助教 さかくち こうた
坂口 公太

2024年9月22日(土)、23日(日)、当院総合診療医センターは、島根県および隠岐広域連合隠岐病院との協力のもと、隠岐郡隠岐の島町都万地区にて「オキフェス2024」を開催しました。本会は、少子高齢化といった社会課題を抱える地域医療の現場において総合診療医の重要性や魅力を学ぶ機会として位置づけられています。大阪や岡山から来島された方や医学生のみならず看護師、看護学生、住民等を含め地域から52名が参加しました。

当センターは、離島や中山間地域を含む地域住民に安心・安全な医療を提供できる総合診療医の養成を使命として活動しています。島根県の今年度の総合診療専攻医割合は、約15%であり、全国平均の約3%を大きく上回り、4年連続で全国一を誇っています。この背景には、地域や大学といった組織の枠を超えた持続可能なネットワークがあり、今回のように島根県や隠岐広域連合隠岐病院といった地域医療機関との連携した取り組みが行われているためです。

「オキフェス」では、隠岐の歴史や文化を知り、地域住民との対話を通じて、地域医療の持続性やその魅力についての活発な意見交換が行われました。参加者が実際に住民宅を訪れて、生の声を聞き、そこから浮かんできた地域課題の解決策を住民とともに議論しながら、発表を行いました。今まさに直面する問題に、必ずしも正解のない中で答えを探っていく過程が地域医療の面白さ、魅力であるということに気づけたようです。参加者の中には、次回の実習先として隠岐を確約した医学生や看護学生もあり、地域医療への関心の高さが伺えました。

今後も当センターは、大学だけに留まらず地域医療支援機関との連携を強化し、地域住民に安心・安全を届ける総合診療医の育成に向けて活動してまいります。



病院の外を出て文化や歴史を学ぶ学生



地域住民との対話



問合せ先 総合診療医センター TEL: 0853-20-2217



2024年11月 発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <https://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



島大病院ニュース 2024年11月

ご報告

神経免疫疾患治療の 進歩への対応について

高度脳卒中センター 助教 ありたけ しゅん
有竹 洵

医学の世界は日進月歩と言われますが、この数年の神経免疫疾患領域は新たな知見や新薬が出現し、再発ゼロを目指せる疾患領域です。神経免疫疾患とは、体の外からの敵(細菌やウイルスなど)から自分を守ろうとする働き(免疫)が間違えて自分の脳や神経を攻撃してしまう病気です。代表的には「多発性硬化症」、「視神経脊髄炎スペクトラム障害」、「重症筋無力症」などがありますが、それらはいずれも希少疾患といわれ、発症される患者さんが少ないことから、豊富な経験をしている医師が少ない点が問題です。

筆者は神経免疫学会に所属し、今年2月に山陰地方で唯一の神経免疫診療認定医に認定されました。先述のこの領域において毎年次々と新薬が発売されており、現時点多発性硬化症では8種類、視神経脊髄炎スペクトラム障害では5種類、重症筋無力症では6種類の治療選択肢がありますが、患者さんに最適な治療を行うためには、的確に診断し、病型を分類し、再発を防ぐばかりでなく、ライフスタイルに合った治療法を選択する必要があります。

患者さんにとってより良い治療選択を行うために、今後は重症筋無力症に対してのクリニカルパスの導入を予定するなど、全国初の試みも実施予定です。「もしかしたら自分にとってより良い治療があるのではないか?」と気になる方は遠慮なく当科にご相談ください。

・多発性硬化症の投薬は下図のように8種類あります。
当院では、専門的見地から診療し、投与方法や頻度以外にも、症状の強さや副作用を考慮して患者さんに応じて適切な治療薬を選択します。

一般名	インターフェロンβ1b	インターフェロンβ1a	グラチラマー塩酸塩	フマル酸ジメチル	フィンゴリモド	ナタリズマブ	シボニモド	オフアツムマブ
投与方法	皮下注射	筋肉注射	皮下注射	内服	内服	点滴	内服	皮下注射
投与頻度	2日に1回	1週間に1回	1日に1回	1日に2回	1日に1回	4週間に1回	1日に1回	4週に1回

問合せ先 内科学第三(脳神経内科) TEL: 0853-20-2198



2024年11月 発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <https://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





ご報告

ワークライフバランスセミナーを開催しました

地域医療支援学講座 助教 ほった ゆきえ
堀田 優希江

地域医療支援学では島根県からの委託を受けて、ワークライフバランス事業を行っています。この度、10月1日(火)にワークライフバランス支援室、島根大学ダイバーシティ推進室と共催にて、1級キャリアコンサルタント技能士、株式会社Woman's代表である宮崎結花氏を講師としてお招きし「イキイキ個性の発揮が組織の成長へ～私らしいキャリア形成をめざして～」と題して、ワークライフバランスセミナーをハイブリット形式で開催しました。

冒頭では、川上ワークライフバランス支援室長より当院のワークライフバランス支援室の成り立ちや、取り組みについてご紹介いただきました。

宮崎氏にはキャリアとは今までの歩んだ軌道であり、自分を知ること自分らしい未来を生きることができるようになることをお話いただき、自分らしい、ありたい自分を明確化するメリットとして、主体的な行動になる、イキイキとした毎日になる、環境に働きかけられるようになることを教えていただきました。

宮崎先生のセミナーは4年ぶりであり、前はオンラインでしたが、今回は対面での開催が叶いエネルギー溢れる姿や分かりやすいお話に引き込まれました。

今後もワークライフバランス支援室と協力しながら、職場環境の改善、仕事家庭の好循環を目指して活動を継続したいと思います。



講師の宮崎氏



講演会



問合せ先 地域医療支援学講座 TEL: 0853-20-2558



ご報告

一般財団法人ごうぎん財団様より院内学級に寄贈がありました

総務課総務係



左から当院小児科竹谷教授、成相修司山陰合同銀行出雲支店長



院内学級の視察

一般財団法人ごうぎん財団様より、当院への院内学級に机、椅子等の寄贈がありました。10月3日(木)に贈呈式を行い、成相修司山陰合同銀行出雲支店長から、目録の贈呈がありました。

院内学級は、けがや病気で入院中の子どもたちの教育のために設置されています。これまでは長期入院の子どもたちが授業を受けていましたが、近年は学ぶ内容が増えていることもあり、短い入院期間であっても、学習の遅れを感じやすい状況となっているため、短期間の子どもたちの利用が増えています。

そのような中、院内学級の机や椅子などの備品は老朽化が進んでおり、椅子のささくれや、子どもたちの身長に応じて机の高さを調節する際も、工具を使う必要があるなどの問題を抱えていました。

この度の寄贈により、子どもたちにとっても、明るい環境で勉強できることになり、前向きに治療に取り組むことができます。また、日常生活においても良い影響を与えることができます。

今回頂戴いたしました貴重なご厚志に対し、感謝申し上げますとともに、入院中の子どもたちが「がんばる力」を持って治療を受けることができるよう、これまで以上に尽力してまいります。

問合せ先 総務課総務係 TEL: 0853-20-2016





ご報告



ご報告

2024年度スキルアップセミナーを実施しました

内科学第三（血液内科） 講師 たかはし つとむ 高橋 勉

以前は骨髄移植と呼ばれていた造血幹細胞移植は、白血病などの血液がん患者さんに治癒をもたらす治療法の一つであり、当院では日常的に実施しています。造血幹細胞移植は様々な合併症が発生し、しばしば患者さんの全身状態が悪化します。また治療後も後遺症が残ることがあり、多くのコメディカルと協調してケアを行う必要があります。造血幹細胞移植の質の向上、均てん化を目的として、厚生労働省は「造血幹細胞移植医療体制整備事業」を実施しており、2020年度から当院は島根県の地域拠点病院に指定され、血液内科・小児科で島根県内の造血幹細胞移植を担う専門職の育成、病診連携の推進に資する活動を行っています。

毎年10月に造血幹細胞移植に携わっている専門職の技術・知識の向上を目的としたスキルアップwebセミナーを実施しており、今年10月5日（土）にセミナーを開催しました（写真1-3）。今回は移植医療に携わる看護職の育成、病棟薬剤師の役割、妊孕性温存を含めたAYA世代患者の支援、移植後白血病再発抑制の対策について、経験豊富な先生方から講演を賜りました。全国から計100名をこえる方が参加され、活発な討議が行われました。セミナー後のアンケートでは、参加された方々から大変勉強になったと高評価をいただきました。

引き続き島根県の血液疾患の診療レベルの維持・向上に努めて参りますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

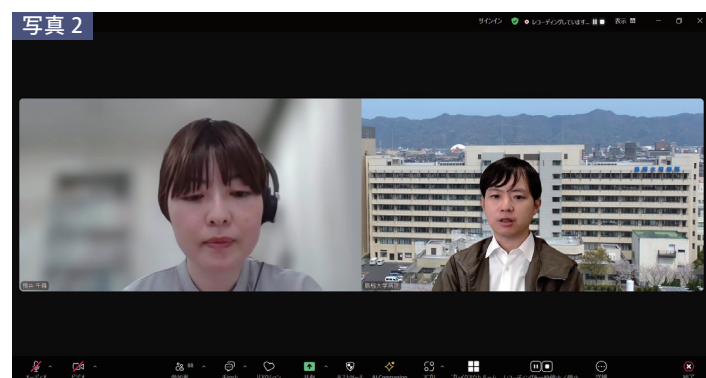


写真2 講演後質疑応答（左から岡山大学鴨井千尋先生、参加者）



写真3 セミナー主催者

問合せ先 血液内科 TEL: 0853-20-2308

大学附属病院所属の産業医活動

内科学講座内科学第一 准教授 やまもと まさひろ 産業医 山本 昌弘

産業医は、業種指定のため医師が務めていますが、業務に医療活動は含まれていません。法令により、事業所と呼ばれる一定の区域内で経済活動等を行っている団体の事業主と業務契約を結び、医学的な見地から事業主に労働者の健康を保全するための助言・指導を行う活動を行っています。

従業員が就労中に生じる健康障害は事業の業種毎にリスクが異なるため、就業環境を理解した関与が重要です。大学病院所属の産業医は次の点で他病院事業所とは異なる特徴を有していると感じています。

島根大学医学部キャンパスは、松江キャンパスと異なり、教育・研究業務を行う医学部事業所と医療を提供する附属病院事業所の2事業所の集合体です。多くの職員はこの2事業所間を自由に往来して労働し、かつ出雲市から自家用車で島根県各地の医療機関へ通勤するなど、労働条件・環境が異なる複数の事業所で従業することが特徴です。内勤・外勤を問わず全ての労働時間は合算され、医学部長・病院長が管理すべき従業員の労働時間となります。地域を含めた医療の持続の免罪符のもと、病院事業領域では、健康を害するリスクを予防するために定めた上限時間を約2倍も超過する時間外労働時間を特例的に認める決断がなされたと感じています。

時間外労働時間が法の認可範囲でも労働者である医師が健康を害することは起こりえます。当院職員の健康保全は地域医療の維持・持続の必要条件です。病院事業所と同様に長時間の時間外労働問題がある物流業界では、物流配送拠点を従来の中間点に新設し、輸送距離を短縮して労働時間内に自動車運転業務を収めるなど、資金を投じて業務の改善を行っています。我々島根大学医学部キャンパスの産業医は、地域医療維持の広い視点を持ち、医学部長・病院長への助言・提言を通じて、県下医療機関の労働条件・環境の改善を促し、行政支援のもと健康福祉の確保措置を執行しうる環境を整える役目を負っているのではないかと感じています。

産業医の職務（労働安全衛生法第13条第1項、第3項、第14条第3項）
労働者の健康障害の防止と健康保持のため、事業者（総括安全衛生管理者）に対し助告し、衛生管理者に指導・助言を行う。

産業医が事業者に対し助告・助言・指導を行う具体的な労働者の健康管理項目（労働安全衛生法第14条第1項）

- ①健康診断・その結果に基づく措置
- ②長時間労働者に対する面接指導・その結果に基づく措置
- ③ストレスチェックとストレスチェックにおける高ストレス者への面接指導その結果に基づく措置
- ④作業環境の維持管理
- ⑤作業管理
- ⑥上記以外の労働者の健康管理
- ⑦健康教育、健康相談、労働者の健康の保持増進のための措置
- ⑧衛生教育
- ⑨労働者の健康障害の原因の調査、再発防止のための措置

※職場巡視を行い、月1回安全衛生委員会に参加し、労働者の健康障害の防止と健康保持が適切に講じられるよう助言を行う。

問合せ先 内科学講座内科学第一 TEL: 0853-20-2183





ご報告



ご報告



第21回島根大学医学部附属病院 関連病院長会議を開催しました

総務課総務係

10月31日(木)に「第21回島根大学医学部附属病院関連病院長会議」を開催しました。

この会議は、当院への患者紹介や当院からの医師の派遣等を通して関係の深い病院・診療所との意思疎通を図ること、また地域医療に貢献することを目的として設置され、毎年1回開催しており、今年で21回目を数えます。会議には、島根県内57関連病院の病院長等と、椎名病院長を始めとする当院関係者48名が出席しました。

冒頭で椎名病院長から挨拶があった後、地域医療に関する病院の取組として「地域医療政策センター開設後の歩み」、「アスリートを守るために」、「共用試験「客観的臨床能力試験(OSCE)」について」の内容を説明しました。また病院の取組として、「本院の医療安全の取り組み」、「周術期管理における医療安全への取り組み」、「手術支援センターについて 安心安全な手術と術後」、「新しい薬剤部」について紹介しました。その後、先進的な医療技術の地域への還元として、「子どものすべての病気を診断・治療・フォローアップできる子ども病院へ」、「ロボット支援人工関節手術」、「新しい産科婦人科医療」、「頭蓋底手術について」、「病理診断の今」、「肉腫・希少がんセンターについて」、「放射線治療について」の内容を説明しました。

当院の理念である地域医療と先進医療が調和する大学病院としての役割を十分認識し、関連病院の皆様の意見をとり入れ、今後も日々改善に努めてまいります。

問合せ先 総務課総務係 TEL: 0853-20-2506



講義風景

ケーススタディのグループワーク

ケーススタディの各グループ発表

「ELNEC-Jコアカリキュラム 看護師教育プログラム」を開催しました

緩和ケアセンター 看護師長 藤井 愛子

院内の看護師を対象に9月14日(土)28日(土)の2日間で「ELNEC-Jコアカリキュラム 看護師教育プログラム」を開催致しました。がんのみならず慢性疾患や老いなど、すべての患者さん、ご家族へ質の高いエンド・オブ・ライフケアが提供できるように、知識・技術を習得することを目指した研修です。

本研修では、下記1から10の内容を系統的・包括的に学習ができるプログラムになっています。講義やロールプレイ、グループワークでのケーススタディーを学びすぐに実践に活かすことができる内容としました。参加者からは「チームアプローチ、ケアリングについて学ぶことができた」「痛みのマネジメントや臨死期のケアに苦手意識があったが、講義を受けたことで知識が付き、事例検討やロールプレイもすることで、苦手意識がなくなった」「患者さんやご家族のことを思って寄り添った看護ができるように学んだことを活かしていきたい」「患者さんやご家族が望む最期を迎えられるようなかかわりをしていきたい」などの感想がありました。

院内にはこの研修の指導者が6名います。今回の研修で指導者もたくさんの方の事を学ばせていただきました。これからも一緒にエンド・オブ・ライフケアについて考え、実践していき、エンド・オブ・ライフケアの向上のためにこの研修を継続していきたいと思えます。

※ELNEC-J
(End-of-Life Nursing Education Consortium -Japan)
終末期の医療に携わる看護師に必須とされる
知識習得のための教育プログラムのこと。

【研修内容】

- | |
|-----------------------------|
| 1. エンド・オブ・ライフケアにおける看護 |
| 2. 痛みのマネジメント |
| 3. 症状マネジメント |
| 4. エンド・オブ・ライフケアにおける倫理的問題 |
| 5. エンド・オブ・ライフケアにおける文化への配慮 |
| 6. コミュニケーション 患者の意思決定を支えるために |
| 7. 喪失・悲嘆・死別 |
| 8. 臨死期のケア |
| 9. 高齢者のエンド・オブ・ライフケア |
| 10. 質の高いエンド・オブ・ライフケアの達成 |





島大病院ニュース 2024年11月

ご報告



西日本医科学学生総合体育大会に参加しました

学務課学生支援担当

8月5日(月)から18日(日)までの14日間、第76回西日本医科学学生総合体育大会【通称：西医体(にしたい)】が開催されました。西医体は西日本のすべての大学医学部44校が参加する医学生のアスレチックの祭典です。参加数は約2万人にのぼり、国内の大会では国民スポーツ大会に次ぐ規模を誇ります。これだけの規模の大会を学生が主体となって運営していることもこの大会の特徴です。毎年各校が主管校となり持ち回りで開催しますが、今年は岡山県の川崎医科大学が主管校でした。

島根大学医学部からは18競技(テニス・ソフトテニス・サッカー・準硬式野球・バスケットボール・バレーボール・バドミントン・弓道・柔道・卓球・ボート・陸上競技・水泳・合気道・空手道・剣道・ラグビー・ゴルフ)に各部活動が参加し、それぞれの競技で活躍しました。特に剣道部男子は団体および個人で準優勝する好成績を収めました。医学生は日々の学習に忙しいなかでも時間を見つけ、課外活動に取り組んでいます。西医体は日々の練習の成果を発揮するまたとない機会です。西医体での経験が参加した学生の財産になればと思います。

問合せ先 学務課学生支援担当 TEL: 0853-20-2088



2024年11月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <https://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



島大病院ニュース 2024年11月

ご報告



左から筆者、林義大医師、島野仁先生(筑波大学)、石原慎一郎医師

第39回糖尿病合併症学会において 当科が優秀演題賞をダブル受賞しました!

かなさき けいぞう
内分泌代謝内科 診療科長 金崎 啓造

2024年10月4日(金)~5日(土)に開催された第39回糖尿病合併症学会において、当科の石原慎一郎医師と林義大医師が見事に優秀演題賞を頂きました!書類選考を通過した候補者10名のうち、3名が優秀演題賞に選ばれ、そのうち2名が島根大学からの受賞という快挙でした。この成果には多くの先生方が驚かれ、会員懇親会では大きな話題となりましたが、最も驚いたのは筆者(金崎)でした。審査員の先生方、そして大会長である筑波大学の島野仁教授に、心より感謝申し上げます。

ここ10年間で、糖尿病合併症、特に腎臓合併症の制御においては劇的な進歩が見られます。慢性疾患の管理はしばしば軽視されがちですが、疾病の重症化を防ぐことは何よりも重要であり、非常に難しい課題でもあります。生活習慣の改善だけではこれらの疾患を完全に制御することは困難であり、最先端の知識と技術を持つ専門家による介入が不可欠です。

島根県では、2019年に筆者が着任して以来、糖尿病合併症の制御を標的とした先進的な治療を積極的に導入しており、糖尿病性腎症を中心に県内の総透析者数も減少傾向にあります。この傾向は今後さらに顕著になることが期待されます。今後も地域における糖尿病および糖尿病合併症の制御、内分泌代謝疾患の管理に関する啓発活動を推進し、同時に最先端の研究成果を発信してまいります。

問合せ先 内分泌代謝内科 TEL: 0853-20-2183



2024年11月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <https://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





ご報告

集中治療における呼吸管理

集中治療部 部長 にかい てつろう
二階 哲朗

当院集中治療部では、重症患者さんの明るい未来づくりのため、長期予後の改善を目指して集中治療のケアにあたっています。重症患者さんに集中治療を施すうえで、予後が悪く重症化に至りやすい疾患の一つに呼吸不全が挙げられます。呼吸不全が起こると低酸素血症を引き起こし生命の危機に陥るだけでなく、多臓器障害を呈すことにより予後不良の状態となります。発症の原因として、肺炎（細菌性、ウイルス性、真菌性）、間質性肺炎、心不全、閉塞性肺疾患、神経筋疾患など様々な病態が関連し、これら原因疾患の治療と並行しながら、適切な呼吸療法を行うことが重要になります。



当院集中治療部において用いる人工呼吸器（ハミルトン社製品）
適切なモニタリングも呼吸不全の予後向上に繋がると考えられています。

集中治療では主に気管挿管のもとで人工呼吸管理を行います。その際には適切に陽圧をかけ、無気肺を予防しつつ、適切な酸素化を保つことも必要ですが、呼吸苦や挿管チューブの苦痛、努力呼吸を軽減し、人工呼吸ケアを適切に管理することも重要になります。そのためには人工呼吸グラフィックと呼ばれるモニター管理を行います（図1）。また、鎮痛薬剤の使用による適切な鎮静管理を行うことは、せん妄や肺障害を予防し、予後の改善にも繋がることが考えられています。人工呼吸管理を含む集中治療に必要なケアには、鎮静・鎮痛管理を含め下記に示す「ABCDEFGF バンドル」の実施が重要であり、これらの実践にはチーム医療が不可欠です。

今後も集中治療に特化した医師、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、臨床工学技士が協働して、患者さんの早期回復と予後の改善を願う日々の集中治療に取り組んでまいります。

「ABCDEFGF バンドル」

- A: Awaken the patient daily; sedation cessation
- B: Breathing: daily interruptions of mechanical ventilation(毎日の呼吸器離脱トライアル)
- C: Coordination: daily awakening and daily breathing(A+B の毎日の実践) Choice of sedation or analgesic exposure(鎮静・鎮痛薬の選択)
- D: Delirium monitoring and management(せん妄のモニタリングとマネジメント)
- E: Early mobility and exercise(早期離床)
- F: Family involvement(家族を含めた対応)、follow-up referrals(転院先への紹介状)、functional reconciliation(機能的回復)
- G: Good handoff communication(良好な申し送り伝達)

問合せ先 集中治療部 TEL : 0853-20-2453



ご報告



小児がんに輝きを！ 子どもたちにエールを！！

小児科学講座 教授 たけたに たけし
竹谷 健
チャイルドライフスペシャリスト くろさき
黒崎 あかね

毎年9月は、「国際小児がん学会」が全世界で「ゴールド・セプテンバー・キャンペーン」を推奨しています。各国・地域を象徴する建物や遺跡等を小児がん啓発のシンボルであるゴールド（金色）にライトアップし、小児がんの治療の重要性を啓発するとともに、子どもたちに必要な医療や研究に“光を照らす”イベントです。当院小児センターは島根県などの協力により、9月14日（土）に松江城、TSK 本社、出雲大社、アクアスの4か所を金色に輝かせることができました。出雲大社と松江城では、ライトアップに先駆けて、小児がんの親の会「かけはしの会」主催のレモネード募金があり、多くのご支援をいただくことができました。

出雲大社では多くの患者さんやご家族のご参拝もありました。久しぶりに会う患者さん同士が懐かしそうに話をしている様子や、子どもたちが一緒に遊んでいる姿を見ることができました。ご協力いただいた皆様には心よりお礼申し上げます。

治療の進歩により80%の小児がん患者さんを救うことができるようになりましたが、まだ20%もの子どもたちを救うことができません。また、病気を持って生活している子どもたちも少なくありません。

すべての小児がん患者さんを100% 治癒させ、そして後遺症なく元気に生活できるように、今後ともご支援ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

問合せ先 小児科学講座 TEL : 0853-20-2220





医学部・附属病院合同災害訓練の実施報告

災害医療・危機管理センター長 渡部 広明
わたなべ ひろあき

10月10日(火)、医学部および附属病院の合同大規模災害訓練を実施いたしました。訓練は震度6強の地震が島根県東部に発生したという想定で行いました。

今回の訓練のテーマは、「情報伝達の強化」とし、現場情報を的確かつ迅速に災害対策本部に挙げ、そして本部の意思決定を現場に速やかに伝えるための一連の流れを訓練しその体制の検証を行いました。発災とともに、初動組織であるDiMCOC (Disaster Medical Crisis Operations Center: 災害医療・危機管理センター) 災害初動本部が立ち上がり、災害対策本部設置の可否を判断して発災から15分前後で災害対策本部が設置されました。

今回の訓練では初めて院内ネットワークを使用した災害情報システムを活用して、各病棟や外来などの被災情報の収集、院内にいる各診療科の医師数調査、トリアージエリアの傷病者の情報を自動集計し可視化するシステムを導入してその使用の可否についても検証しました。過去の巨大地震の大半で院内ネットワークが活用可能であったという事例をもとに本システムが開発されましたが、院内ネットワークが活用できる環境であれば本システムで速やかな情報収集が可能であることが検証されました。今後さらに良いシステムとなるよう改修を進めて参ります。

地震災害で被災した傷病者を速やかに受け入れる「現地診療指揮所」では、トリアージエリアと救護所を設置しての診療訓練を行いました。今年も医学生が傷病者役ボランティアとして参加してくれました。さらに今年は各病棟での被災後の対応についての訓練案を募集し、病棟災害訓練も実施しました。患者避難の判断や被災したエリアでの診療継続など災害時の病棟対応の手順を確認しました。当院では附属病院を挙げて災害対策に取り組んでいます。万が一に備えて速やかに災害負傷者への医療提供ができるよう定期的な訓練を続けて参ります。



問合せ先 災害医療・危機管理センター TEL: 0853-88-3040

